

2017 年度 入学試験問題

国 語

(第 4 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言語が文化と密接な関係性にあるのは間違いないありません。単語レベルで考えてみても、例えば日本語では、「梅雨」「秋雨」「驟雨」「小雨」「霧雨」など「雨」を表す語がたくさんあります。日本には四季に応じてさまざまな雨の降り方があるので、それを呼び分ける言葉が発達するのは当然です。雨が降らない砂漠地帯などでそれほど雨に関する言葉が必要なわけがありません。ユウボク民族のモンゴル人が使うモンゴル語には、馬を呼び分ける言葉がたくさんあるようですが、これも生活に馬が大切な位置を占めているからです。

また、私たちは言葉を用いて思考しているので、使っている言葉によって認識が異なってくるものがしばしばあります。よく知られているように「水」と「お湯」は科学的に言えば同じ物質ではありますが、^①日本語では別のものとして認識しています。ただ、ここで問題となってくるのは、私たちの認識の方式に応じて言葉が作られているのか、それとも言葉によって私たちの思考を決定されているのか、という問題です。

これは「鶏が先か、卵が先か」と同じでどちらともいえない問題です。例えば、日本語では敬語が発達しています。学校や会社などには先輩と後輩という概念があり、年齢が一つでも下であるか、入社年度が一年遅ければ敬語を使うのが普通です。日本では上下関係を大切にしている文化があるからこのような敬語の使用があるわけですが、逆に敬語を使っているから上下関係を感じるという側面もあります。私は以前、リュウガク生が多く住む寮にいたことがありますが、この寮内では、日本人同士も敬語を使わずに話していたため、年齢的には五〜六歳ぐらい上の人とも、距離を感じることはありませんでした。^②それを考えると、距離があるから敬語を使うというより、敬語を使うから距離ができるのではないかとも思えます。

言語が思考を決定しているとした有名な仮説に、「サピアールウオーフの仮説」があります。ウオーフというアメリカの言語学者が、北米先住民のホーピ族の言語を取り上げ、その言語には時間を表すあらゆる言葉が存在していないとしました。だから、ホーピ族は我々と同じような時間の認識の仕方をしていないというのです。

ただ、仮にウオーフの観察が正しかったとしても、言語が思考方法を決定づけているかどうかはわかりません。文化が先にあつて、それに従った思考を彼らはしており、その思考に従って言語が決定づけられているのかもしれない。

言語と文化の関係を考えるのに、非常に興味深い事例として、ダニエル・エヴェレットの『ピダハン―「言語本能」を超える文化と世界観』（屋代通子訳、みすず書房）をアゲルことができ、アゲルことができ、アゲルことができます。これはアマゾンに住み、外界との交流をあまりせず、元々の生活と言語を保っていたピダハンという民族に関する記録です。著者はアメリカ人の言語学者で、ピダハンたちと足かけ三十年にわたつてともに生活するなどして、彼らの言語を身につけ、調査しています。

驚くべきことに、ピダハン語には「数」という概念が欠如しているのだと言います。^③ 数というのは、物事を抽象化して考えるということです。例えば、「魚が三匹」という数え方は、一つの個体がどのくらいの大きさであるとか、どのような形であるということは無視しています。ピダハンの人たちは、小さい魚二匹と中くらいの魚一匹は同等という認識の仕方をするので、「二匹」とか「一匹」という認識をしないのです。そして、このような認識をするピダハン語社会の中で大人になってしまった人たちに、数字を教えようとしても、どうやっても十まで覚えさせることができないばかりか、十一を計算できるようにもさせられなかったと言います。

同様に、「すべての、それぞれの、あらゆる」といった数量的概念を表す言葉もないと言います。論理学を勉強したことのある人はご存知だと思いますが、西洋の論理学ではこれらの概念は普遍的で真理に近いものと考えられています。しかし、そんなものはピダハンにはありません。とすれば、^④ 西洋的論理学は普遍的ではないかもしれないという方向にも考えが及びます。

また、^⑤ ピダハン語には色を表す概念もないと言います。最初、「黒」という色を表していると思われた言葉は、実は「血は汚い」と言っているだけであり、「白」と思われた言葉は「それは見える」と言っているだけだったそうです。もちろん、ピダハンは色が見えないわけではありません。自然界の色というのはもともと多様なもので、私たちの言葉はそれを分類し、「青、赤……」のように名前をつけているだけです。ピダハンはその感知した色を一般化しようとしただけ、ということなのです。

ピダハン語には「右」「左」という言葉もありません。位置関係を自分の体との関係から考えることをしないのです。では、どうするのかというと、川がどこにあるのか、ということや常に意識し、その川との位置関係から方向を言うのだといいます。確かに、右とか左というのは、自分の体を基準にしている以上、X 的なものに過ぎませんから、川を基準にした方がY 的な位置を表せます（川を渡ったらどうなるのか、という疑問はありますが）。

さらに、ピダハンには民話も創世神話も存在しません。そもそも歴史を語ることもすらしません。というのも、彼らの d カチカンでは、直接的に体験したもののだけが重視されるからだそうです。直接体験していないものは語れないという文化的制約を受けているのです。

エヴェレットはそもそもキリスト教の伝道者で、ピダハンたちに信仰を植え付けるためにピダハン語を学習していたのですが、どうやっても彼らに信仰を植え付けることはできませんでした。聖書の話には目撃者がいないので、誰も信じようとはしなかったと言います。そして最終的にエヴェレット自身が信仰を失ってしまいました。

^⑥ 言語とは文化そのものだ、という話自体はよく聞きますが、ピダハンの事例などを読むと特にそれがよくわかります。

（橋本陽介『日本語の謎を解く』より）

問1 ——線 a、d のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがな等が必要な場合はひらがなでつけなさい。

問2 次の段落はもと本文の中にあつたものです。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分の直後の五字をぬき出して答えなさい。

思考と言語は、そもそも切り分けて考えることはできないように思います。中国語にもいわゆる時制という文法形態はありませんが、中国人が時間を認識できないということはなく、別の表現で表しています。ある言語による思考方法を考えるには、その言葉を全体で考える必要があります、一部分だけを取り出して論じるわけにはいきません。

問3 ——線①「日本語では別のものとして認識しています」とありますが、どうして日本語では「水」と「お湯」が別のものであると認識しているとわかるのですか。それを説明した次の文の□にあてはまることばを十六字以内で答えなさい。

日本語には□から。

問4 ——線②「それ」が指し示す内容を三十字以内でまとめて答えなさい。

問5 ——線③「数というのは、物事を抽象化して考えるということですが、この説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 数というのは、それぞれの個性を強調した上で人に考えさせるものであるということ。
- 2 数というのは、それぞれの真実がよく見えるように人に考えさせるものであるということ。
- 3 数というのは、それぞれの違いをぼかした上で人に考えさせるものであるということ。
- 4 数というのは、それぞれの個性を生かし一般化して人に考えさせるものであるということ。

問6 ——線④「西洋的論理学は普遍的ではないかもしれないという方向にも考えが及びます」とありますが、これはどのような意味ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 現在の世界で当然だと思われることに、例外が存在しているかもしれないと思わせるということ。
- 2 西洋のみで使われている常識が、世界共通の常識であるかもしれないと思わせるということ。
- 3 西洋で用いられている数量的概念が、実は真実ではないかもしれないと思わせるということ。
- 4 ピダハンが用いている考え方が、世界で通用している論理に近いかもしれないと思わせるということ。

問7 ——線⑤「ピダハン語には色を表す概念もない」とありますが、ではピダハンの目に映っているものについてはどのようなことが言えますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ピダハンの目には日本人とまったく同じものが映っている。
- 2 ピダハンの目には日本人が見えている色で映っていない色がある。
- 3 ピダハンの目には日本人に比べて多彩たさいな色が映っている。
- 4 ピダハンの目には日本人とは基本的に違うものが映っている。

問8 空らん X と Y には対義の表現が入ります。その組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 X Ⅱ感情 Y Ⅱ理論
- 2 X Ⅱ相対 Y Ⅱ絶対
- 3 X Ⅱ部分 Y Ⅱ全体
- 4 X Ⅱ客観 Y Ⅱ主観

問9 ——線⑥「言語とは文化そのものだ」とありますが、これはどういうことですか。文中の具体例を二つ用いた上で八十字以内で説明しなさい。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和五十年代、小学生だった主人公（ワタル）の目を通して、思い出の形で書かれた物語である。主人公にはヤンチャ・ノリオ・ハム太という、遊ぶのもいたずらをするのも、叱られるのもいつも「緒だった仲間がいたが、四年生になったある日ヤンチャが原因不明の病気で亡くなってしまふ。以下はそれに続く場面である。

ヤンチャのお葬式に、僕らは出なかった。前におじいちゃんが死んだ時、焼かれた後の白い骨を箸で拾った話をしたら、ノリオもハム太も絶対に出たくないと言ったのだ。

その日、太陽がすっかり沈んでしまうまで、僕らは秘密基地のそばの河原にぺたんと腰をおろし、ときどき小石を水に投げこんだりして過ごした。昼間のうちよく晴れていたせいで、あたりはこの前よりさらにドブ臭かったけれど、お尻の下の丸い石はどれも温かかった。

「ハム太……」

あたりがだいぶ薄暗くなつてから、ノリオが言った。

「お前んちの修理工場さ。お前が継ぐんだろ」

「そんなの、まだわかんないよ」ハム太は、鼻のつまりきつた声で言った。「でも、まあたぶんな。……なんで？」

「オレさ。今、決めた」と、ノリオは言った。「オレはこれからうんと勉強して、将来はきつとすごい発明家になってみせる」

「発明家？」

「うん。それで、いつか絶対、本物のタイムマシンを発明してみせる。正真正銘、本物のやつをさ」

「お前、まだあきらめてないのかよ」とハム太は言った。「ヤンチャみたいな病気を治したいんなら、医者になったほうが早いんじゃないの？」

「だめなんだ、それじゃ」と、ノリオは言った。「今から医者になったって、ヤンチャを助けるのには間に合わない」

① 答えようがなくて黙っていると、ノリオは僕らのほうに向きなつた。

「なあハム太、オレを信じろよ。オレ、絶対頑張って作りだしてみせるからさ。そしたらお前、お前んちの工場の機械全部使って、それを組み立ててくれよ。そうすれば、みんなで今の時代に戻ってきて、ヤンチャのやつに会える。病気だつて治してやれるかもしれない」

「で……できるのかな、そんなこと」

とハム太。

「できるのかな、じゃなくて」ノリオはきつぱり言いきつた。「やるんだよ」

「……うん」

もう、誰も泣いてはいなかった。何か大きなものが——ひとかたまりの時間というか、ひとつ

の時代とでもいうべきものが終わりをかけているのを、そのとき僕らは感じていたのだと思う。どんなに泣いたところで、ヤンチャはもう帰ってこない。四人は、永久に三人になってしまった。これから先、僕らは何とかがして、ヤンチャ無しでやっていかななくてはならないのだ。

「それで、ワタルはさ」ノリオは僕に目を向けた。「お前は、いろいろ想像すんの得意だし、作文もうまいだろ？ だから、これまでのことをちゃんと書いてほしいんだ。オレたちや、それからもちろん、ヤンチャのことをさ。いつかオレたち、今日のことをはっきり思い出せなくなるかもしれない。そんな時でも、書いたものがちゃんと残ってたら、それを読んで、今のこの気持ちを思い出すことができるんじゃないかと思うんだ。何ていうか……ほら、押し入れから出てきた日記みたいにし。わかるか？」

「うん」と、僕は言った。「わかるよ」

実際、僕にはノリオの言おうとしていることがよくわかった。

僕らはもう、たとえば七歳ななさいだった頃ころのことを忘れてる。四歳よっさいごろの記憶きおくともなれば、すでに霧きりの彼方かなただ。これだけは絶対に覚えておこうと心に決めたことでさえ、僕らはころりと忘れてしま。やがては、ヤンチャのことも、あるいは、ヤンチャがどうして死ななければならなかったかということも。

「いつか、本物のタイムマシンが出来たらさ」と、僕は言った。「あのおっちゃんと言ってたみたいに、ずっと昔の世界にも行こうな」

「うん」

「きつと行こうな」

「うん！」

「絶対……ぜったい行こうな……」

あれほど固く交かわしたはずの約束が、やがて力を失っていくのはなぜなんだろう。

あんなに強い思いが、いつしか薄れていってしまうのはどうしてなんだろう。

② あの頃——僕は何度も、何度も……指の節えんびつが白くなるくらい強く鉛筆えんぴつを握にぎりしめてノートに向かった。

でも、宿題の作文を書くような具合にはいかなかった。それどころか、一行も書けなかった。ちやうど、病院からの帰り道、ほかの二人に気持ちを伝えようとして言葉が見つからなかったあの時と同じように、何から書き出せばいいのか見当もつかなかった。何が大事なことで、何がどうでもいいことなのか、迷いはじめたらどんどん深みにはまってしまって、結局いつも最初の一文すら書きつけることができなかった。

早く書きあげて読ませろよ、と他の二人から急せぎたてられるたびに、僕は、もう少しだからとか、最初からもういっぺん書き直してるとか言っでごまかし続けた。僕が人より得意なこと

といったら作文を書くことくらいしかないのに、それさえもできないでいるなんて言えるわけがない。

やがて僕らは五年生になり、再びクラス替えが行われて、今度は三人ともばらばらになった。ノリオやハム太がどうだったかは知らないが、^③僕は正直、ほっとする思いだった。

書けないでいたせいばかりじゃない。彼らと一緒にいる限り、何をしていても一人足りない」といふ感じから逃れられなかったからだ。

柿どろぼうもセミ捕りも、缶けりも高オニも戦争ごっこも、前ほど面白くなかった。三人でいる寂しさよりは、一人でいる寂しさのほうがまだましに思えるほどだった。

そうしていつしか、あの日の約束は I になっていった。

皮肉なものだ。〈約束を守らなければ〉という、使命感にも似た強い気持ちがあった頃は、経験を言葉にする能力が足りなかったというのに、ようやくその能力が身に付いた頃には、気持ちのほう II 薄らいでいる。時とともに色褪せていくのは、記憶ばかりではないのだ。

そして僕は、ひとつ学んだ。

〈約束を果たすには力がある〉

どれほど固く交わされた誓いも、どんなに強い思いでさえも、それだけでは何の意味もない。

^④実現させるには、実現させるに足るだけの力が必要になる。あの頃の僕にはその力がなかった。なぜって……子供だったから。

いや——わかっている。こんなのは、ただの言い逃れにすぎない。

そういう具合に、僕が自分の身に降りかかるほとんどのことから逃げ、残りを III やり過ぎていく間に、世界はいつのまにか新しい時代を迎えてしまった。

ひとつの世紀の終わり。

ひとつの千年紀の始まり。

何がそんなにめでたいのか、お祭り気分で沸き返っている世間を、^⑤僕は（ ）気分で見つめていた。何もかもが大きく変わるように見えて、そのじつ、変わるのはいずれ年号くらいじゃないかと思えたからだ。昨日とよく似た今日が、今日とよく似た明日が、ただ IV くり返されていくだけじゃないか、と。

あるいはこんなふうな諦めも、一種の逃げなのかもしれないけれど。

【 中略 】

そうして、僕はといえは——。

人のことは言えない。相も変わらずはつきりしない性格のまま、〈クウソウヘキ〉に身をまかせて毎日を送っている。一度は会社勤めもしてみたのだが、結局、一年ともたなかった。それきり定職にはついていない。気の向くままにあちこちの国をふらふらして、目にしたことや心に引

かかったことを書き留めてはみるものの、他人に読ませたことなどないし、どこかに発表しようという気もない。このごろは親もあきらめているらしい。

それでも僕は——そんな日々の合間を縫うようにして、少しずつこれを書きつづった。あの日から数えるはずいぶん時間がたってしまったけれど、とにもかくにも最初の一行を書き始めることには成功し、あとは最後まで書きあげようと努力した。

ただし、あの頃のような使命感からじゃない。果たせないままの約束をずっと引きずって歩くのが、いつからか、しんどくてたまらなくなってきたからだ。逃げるのをやめた、というよりは、正直なところ、もはや逃げ切れなくなった、というのに近い。

けれど、これは、^⑥今まで僕が書きためてきたようなものとはずいぶん趣が違っている。だから、この先たどる道筋も、違っていくんじゃないかと思う。少なくとも、書いたものを自分以外の誰かに読んでもらいたいなんて思ったのは、これが初めてだ。

そう、誰よりもまずは、あの二人に読ませてやらなくちゃならない。

僕らがあの日、河原で交わした約束を思い出すために。

そして、ヤンチャがあんなふうになるまで僕らが考えてみようとしなかったことを、もう一度確認するためにだ。

歴史に〈へもし〉はない、というあの有名な言葉どおり、いつぺん起こってしまったことは二度と変えようがない。タイムマシンを持たない僕らに許されているのは、過去の上に今を、今の上に未来を積み重ねていくという地道な方法だけだ。後戻りはできない。

その意味において言うなら、あるいはこれは僕にとつての——いや、僕ら四人にとつての、〈タイムマシン〉第一号と言えるのかもしれない。

なんだか、大海原おおうなばらに向かって手紙入りの小瓶こびんを投げるみたいな気分になってきた。

あの二人のほかには誰が読んでくれるのかはわからないけれど、これを手にしたその人が、きつとまた別の誰かに手渡てわたしてくれることを信じて……。

〈発進！ 僕らのタイムマシン！〉

（村山由佳「約束」より）

問1 空らん I Ⅳ にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|---------|---|---------|---|---------|
| 1 | I | むちゃくちやに | Ⅱ | なしくずしに | Ⅲ | とめどなく |
| | Ⅳ | うやむやに | | | | |
| 2 | I | むちゃくちやに | Ⅱ | やみくもに | Ⅲ | きびきび |
| | Ⅳ | とめどなく | | | | |
| 3 | I | うやむやに | Ⅱ | なしくずしに | Ⅲ | のらりくらりと |
| | Ⅳ | とめどなく | | | | |
| 4 | I | うやむやに | Ⅱ | むちゃくちやに | Ⅲ | あつけらかんと |
| | Ⅳ | のらりくらりと | | | | |

問2 ~~~~~線 a 「の・b」 「られ」と同じ意味で用いられているものを次から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- a
- 1 弟の作文より、僕のはよく書けている。
 - 2 弟は作文が書けるの、書けないのとうるさい。
 - 3 弟の書いた作文を直してやった。
 - 4 弟の作文はじつによく書けている。
- b
- 1 捨てられた猫を拾ってくる。
 - 2 あと五分は寝られそうだ。
 - 3 友のことが案じられてならない。
 - 4 家庭訪問に来られた先生を出迎える。

問3 線①「答えようがなくて黙っていると」とありますが、その理由を説明した次の文の [] にあてはまる四字熟語として最もふさわしいものを後から一つ選び、番号で答えなさい。

亡くなったヤンチャに会いたい気持ちは自分達も同じだが、タイムマシンを作るというノリオの計画はあまりに [] だと思ったから。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | 空前絶後 | 2 | 疑心暗鬼 | 3 | 針小棒大 | 4 | 奇想天外 |
|---|------|---|------|---|------|---|------|

問4 線②「あの頃ノートに向かった」とありますが、この時の「僕」の気持ちを表している部分を文中から三十字以内でぬき出し、はじめとおわりの五字を答えなさい。

問5 —— 線③「僕は正直、ほっとする思いだった」とありますが、その理由としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 書いたものを早く読ませるとせかされる機会が減ると思ったから。
- 2 三人が顔を合わせているいつもヤンチャのことを考えてしまうから。
- 3 「僕」にとっては二人でいるよりも一人でいる方がまだ気が楽だったから。
- 4 なにを書けばいいのかわからずにいる自分に時間的な余裕よゆうができるから。

問6 —— 線④「実現させるには、実現させるに足るだけの力」とありますが、「僕」にとってはどのような力だったのですか。それを具体的に表した部分を文中から十字でぬき出しなさい。

問7 —— 線⑤の（ ）部分にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 おだやかな	2 うかれた	3 うつろな	4 さめた
---------	--------	--------	-------

問8 次の段落はもと本文の中にあつたものです。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分の直前の五字をぬき出しなさい。

でも、過去をくり返し見つめ直すことで、未来を変えていくことならたぶん、できる。簡単ではないにしろ、可能ではあるはずだ。

問9 —— 線⑥「これは、今まで僕が書きためてきたようなものとはずいぶん趣が違っている」とありますが、それを説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 このヤンチャについての文章は、今まで書いてきたものと違って、誰かに読んでももらいたいという気持ちで書いたものであるということ。
- 2 このヤンチャについての文章は、今まで書いてきたものと違って、あのころの約束を果たしたいという気持ちで書いたものであるということ。
- 3 このヤンチャについての文章は、今まで書いてきたものと違って、誰かに役立ててもらいたいという気持ちで書いたものであるということ。
- 4 このヤンチャについての文章は、今まで書いてきたものと違って、小説家として生計を立てたいという気持ちで書いたものであるということ。



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。なお、表記は現代かなづかいに改めました。

□の終わり

夜来の颯風たいふうにひとりはぐれた白い雲が
気のおおくなるほど澄すみに澄んだ
かぐわしい大気たいきの空をながれてゆく
太陽の燃えかがやく野の景観けいかんに
それがおおきく落とす静かな翳かげは
……さよなら……さようなら……
……さよなら……さようなら……
いちいちそう頷うなずく眼差まなざしのように
一筋ひとすぢひかる街道かいどうをよこぎり
あざやかな暗緑あんりくの水田みずたの面おもてを移り
ちいさく動く行人ぎんじんをおい越こして
しずかにしずかに村落そんらくの屋根屋根や
樹上じゆじやうにかけり
……さよなら……さようなら……
……さよなら……さようなら……
ずっとこの会釈えしやくをつづけながら
やがて優やさしくわが視野しやうから遠ざかる

(伊東静雄『反響』より)

問1 この詩の文体と形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 口語定型詩 | 2 口語自由詩 | 3 口語散文詩 |
| 4 文語定型詩 | 5 文語自由詩 | 6 文語散文詩 |

問2 この詩の特徴とくちょうとなつている表現技法の組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | |
|--|------------------------------|------------------------------------|
| 1 倒置法 <small>たうちほう</small> ―擬人法 <small>ぎじんほう</small> | 2 くり返し―対句 <small>たいく</small> | 3 直喩 <small>ちよくゆ</small> (明喩)―体言止め |
| 4 直喩(明喩)―対句 | 5 擬人法―くり返し | 6 倒置法―体言止め |

問3 ―線「それ」とは何を指しますか。詩の中から一語でぬき出しなさい。

問4 題名の空らん には季節を表すことばが入ります。漢字一字で答えなさい。

問5 この詩について話し合いました。次の1〜4の意見のうち、みんなから賛同を得られなかったものが一つあります。番号で答えなさい。

- 1 この日は台風が去つてすぐくさわやかな天気なんだろうな。でも、どこか気の晴れないさみしさを感じるんだよね。
- 2 空を見上げたときの詩かと思つたけれど、山の上から見下ろしたような風景も描えがかれています。なんだかものすごい広がりを感じました。
- 3 ただの風景の詩だと思つたけど、「ちいさく動く行人をおい越して」のところで人の気持ちをよんだ詩に思えてきたよ。「行人」は作者自身かもね。
- 4 「太陽の燃えかがやく」っていうことばにエネルギーが感じられるよ。別れの後の新しい出会いもあるからわくわくするなあ。

4 次の①～⑤の各文には、まちがって使われている同じ読みの漢字が一つだけふくまれています。それを正しく直した漢字の部首名を、例にならって答えなさい。

例 毎晩おそくまで必死に受験勉強を続けてきた努力の成果があらわれて、見事に合確を勝ち取った。

「答え きへん」 確↓格

- ① 重要な書類が散乱して失われることを防ぐために、事前に複製して大切に保館しておくことが理想的である。
- ② 海外から転居して数年経過したが、今も生家の家具の配置や四季折々の庭の情景があざやかに脳理にうかぶ。
- ③ 日常生活での疑問を放置せず、百科事典やネットで調査する習慣を早期に確立することが、成功への王堂だ。
- ④ 学芸会で児童が上演した演劇でステージが最高調に達し、感激した観客の盛大な拍手が鳴り止まなかった。
- ⑤ 筆記試験の成績にも自信があつたが、面接での口答試問に上手に対応できたため、志望校に無事入学できた。